

ナカナイ族の身体表象と眼の隠喩

山路 勝彦

ナカナイ族はパプアニューギニアの西ニューブリテン州に住み、言語的にはオーストロネシア語族に属す。焼畑でのタロ芋栽培を主要な生業とし、母系半族による縁組交換をもって社会の基礎となす特徴がある。筆者は、野外調査をしていくうちに彼らの身体表現にたいへん興味を抱いた。とりわけ、視覚器官としての眼が多様な隠喩表現として用いられている現象に関心を惹かれた。以下の記述は、その時の調査結果に基づいている⁽¹⁾。

1 身体論の視点

最近の身体論の興隆は、時代に応じて人間の身体自体が多様な観照的であったこと示している。現代の生理学者にとってみれば、生理的機能を果たす身体は普遍的に同じ働きをする存在と映るかもしれないが、これに対して、身体に向けられた眼差し自体は制度的に意味付けられた歴史的所産であるとみる立場が、急速に普及しつつあるように思われる。同様に、マルセル・モースの身体技工の研究以来、文化的所産としての身体の考察は幅広い支持を受けている。実際に、眼、耳、鼻、口などの感覚器官から発する表情は常になんらかの情報を伝えていて、しかもその意味内容は文化圏ごとに異なっているから、身体技工はきわめて多様なあり方を示す。自然的所与として身体に備わっているこれら器官といえども、それぞれの社会が仕組んだ情報伝達の独自の様相は、デズモンド・モリスの『ボディウォッチング』に詳し

い。例えば、眼を取り上げると、彼は人間を「視覚的動物」と位置付けたうえで、それが身体言語の役割を果たし、様々なジェスチャーとして使われる豊富な実例を紹介している [Morris, D. 1985 (藤田統訳 1992 :65-85)]。

しかしながら、身体には別の一面がある。外界の事物を知覚するには眼で見たり、手で触れたりするのであって、身体そのものを通して外界は認識されるのである。この意味では、視覚あるいは触覚は世界を認識する器官である。そうしてみれば、この感覚器官の省察を除いては身体論自体が十分な成果を上げられないに違いない⁽²⁾。他方、身体はまた経験を貯蔵する倉庫でもある。身体経験が認識の基礎をなしている次の例を考えると、そのことはよく理解される。結論を先に言えば、我々の使う概念は大部分が日常生活の隠喩を基に構成されていて、しかも身体経験に根ざしたものが多く [Lakoff, G. & M. Johnson 1980 (渡部昇一他訳1986)、尼ヶ崎彬1990、河合利光1993]。例えば、我々は何気なく、幸せのとき「上機嫌」ということばをよく使う。この場合、「機嫌」は「上/下」の比喩で表現される。人間は元気なときは真っすぐな姿勢をとり、沈んでいるときはうなだれるのが普通であって、この身体経験が基礎にあるからこそ、始めてそのことばは理解される。

ところで外界認識と身体の問題について言うとき、感覚器官としての眼を最初に考えてみる必要がある。まず第一に、現代の我々の生活にとって眼の役割は限りなく大きい。本を読む、テレビを

1 この調査は、1991年7月から10月、1992年9月から12月にわたって行なわれた。調査にあたっては文部省科研費国際学術研究（学術調査：課題番号03041084）から資金を得ている。また現地では、The Institute of Papua New Guinea Studies および West New Britain 州政府から調査にあたっての便宜を得ている。

2 欧米でも感覚器官への文化的意味付け、そしてその比較研究が最近では進められている [例えば、Howes, D. 1991]。ハウスの研究は西欧社会が過度に「視角」に頼っていることの反省から出発していて、筆者の問題関心と通じるところがある。

見る、パソコンの画面とにらみ合うなど、我々の日常は見ること、つまり眼の働きに大きく依存していて、視覚情報の占める位置は格段に高い。「視角」、「視野」、「視点」などのことばが示すように、我々の思考を語るに際しても、眼の隠喩の効果をいなければ会話自体が成り立たない。こうした実状からすると、諸々の感覚器官のなかでも、視覚に優位性を与える世界に我々は住んでいると言っている。

実際に知覚心理学では、方法論的観点から視覚の優位性を強調する。例えば、次の見解を吟味してみよう。すなわち、視覚は、「安定した感覚」であって、「他の感覚情報によって修正を受けたり、変更されたりすることはほとんどない」[丸山欣哉 1969:271] という主張である。感覚器官はそれぞれの役割を持っていて、刺激に対する認知を効果的に行なう。しかし、視覚、聴覚、嗅覚などが別々に判断を下しては知覚上の混乱が生じてしまうので、すべての感覚器官が統一されていなければならない、その統一は視覚によってなされるというのが、その考え方の基本である。

しかし、視覚に優位性を認める思考様式は実は歴史的産物にすぎない、という主張がある。一例を西欧の歴史にとってみると、現在のような視覚優位な趨勢は比較的新しく、近代の所産だという見解が聞かれる。ヨーロッパ中世はこのことを考えるのにたいへん興味深い。この時代、もっとも洗練された感覚、すぐれて知覚的な感覚、世界とのもっとも豊かな接触をうち立てる感覚とは、聴覚であった。なぜならば、キリスト教会の権威の下で「神のことばを聴く」ことこそが信仰の証であったからで、このような環境では、官能的な欲望に直結する視覚が、神学的に価値付けされた聴覚より劣位に置かれていたとしても不思議ではない[中村雄二郎 1979:51]。

民族誌的事実に照らしてみても、感覚器官のうちどの器官を重要なものと位置付けるかは、文化に応じて多様である。人類学の教科書にも登場するほど有名になったブラジルのスヤ族は、「話すこと」と「聴くこと」に積極的な価値を与えている。それだから、若者が話し、歌い、演説することは大切な営みとされている。これに比べると、「見ること」はさして重要でないばかりか、眼は危

険で、妖術に通じる反社会的な部位でさえある。それほどに、口と耳は彼らにとって重要な器官である。彼らは唇と耳に装飾のため円盤をはめこむ習俗を持っているが、それはこうした感覚器官を強調する象徴的な営みに他ならない。彼らにとっては、「聴くこと」と、「理解すること」、「知ること」とは同一の語彙で表現される。こうして耳に穴を穿つ習俗のなかには、聴覚の営みの大切さが象徴的に刻印されている[Seeger, A. 1975:211-224]。

これらの事例は視覚以外の感覚器官の重要性を示している、我々の視覚優先文化が決して普遍的でないことを語っている。「理解する」とは「聞く」ことだとするスヤ人の考え方は、視覚に頼って外界の現象を理解しようとする我々の文化を相対化するものだろう。以下の議論ではナカナイ族の眼の隠喩が取り上げられよう。そして、眼は「見る」ことに関わる生体器官であると同時に、多様な隠喩表現を生み出していることに注意が向けられよう。彼らがどのような意味付けを眼に与えているのか、考察してみることがここでの目的である。

2 身体の位相

ナカナイ族にとって生身の身体は、生きるという意思を持った存在であるとともに、自分を表現する素材でもある。自己を表現するとは、話したり聞いたりする言語活動の他に、身体を飾り立てることによって他人に自己の存在を示すことを言う。男女に関わらず、多くの年配の人は若いときに耳や鼻に穴を開けた経験を持っていて、かつてなら猪の牙を差し込んで美を誇ったものである。顔に刺青を施す習慣は今も健在である。その文様は恣意的で、点と線の組合せで花卉などを象ったりする。主に若い女の子がこうした刺青をするのが、顔を装飾することによって美しくなると人々は考えている。

顔はまた人間の表情を作り出すキャンパスである。とりわけ彼らは、しばしば滑稽な仕草で周囲の人間の興味を誘う。例えば、臉をめくって裏蓋の赤みの肉質部分を露出させ、それとともに白目をむきだし、あたかもお化けのような格好をして

人をからかってみたりする。唇を丸くとんがらせ、鼻と一緒に紐で括って愛敬を楽しんだりする。

身体はこうした愛敬表現の場であるとともに、やはり命そのものが宿る場である。生きているとは、彼らの考えでは息をしていることで、その反対に死とは息を止めた状態である。そしてその身体は、見たり聞いたり触ったりする感覚器官を持ち、思考をし感情を持っている。だが、人間の身体は他の生きものとは決定的に違っているとされる。その相違点とは、第一に人間には考える能力があるし、第二には魂（アヴレラ avurera）を持つということである。魂は人間の心臓のなかに宿るとされ、また夢を見ているときはしばしば体外に出ると考えられている。魂には人間を活動的にさせる根源的な力があるとみなされ、そのために魂が永遠に体外に出てしまうと、死が訪れる。

ただし同じニューブリテン島でも、他の地域では人間以外の生きものにも魂を認める考え方が見出せる。たとえばニューブリテン島南部カンドリアン地方のカウロン族では、豚にも人間と同じように魂の存在を認めているし [Goodale, J. G. 1985 :233]、東南部に位置するマエンゲ族では、タロ芋にも魂の存在を認めている [Panoff, F. 1969 :28]。もっともナカナイ族自身、別の方言群に属する地域では、タロ芋にも魂を認めていると覚しきふしがみられる。その地域を調査したヴァレンタインは、カルル・ラ・マボ kalulu-la-mavo、あるいはハルル・ラ・マボ halulu-la-mavo の存在を報告し、前者には「タロの魂」、後者には「タロの影」という訳語を当てている [Valentine, C. A. 1965 :187]。この記述に従う限り、タロ芋に魂の存在を認める地域と認めない地域とがあり、同じナカナイ族でも地域差がはなはだしいことを予想させる。

話を筆者の調査地に戻し、先の問題を続けて考えていきたい。ナカナイ族が人間と他の生きもの、もしくは物とを区別する考え方は、様々な言語的使用のなかに見出される。例えば、人間の影はカヌラ kanura と称され、他の生きものを含め物体すべての影はマウボ mauvo と呼ばれ、語彙

的に区別される。このように言語的用法に照らしてみると、人間の自然界の位置付けがよく見えてくる。とりわけ、その身体の位相は、言語的用法の検討を通してみると、はっきりした特徴が浮かび出てくる。

これまでにメラネシアの研究者は、オーストロネシア語における接辞の研究から、名詞が二種の範疇に分類されることを指摘してきた。それによると、所有関係を表現する場合には二種の用法があり、それは、接尾辞を用いて所有関係を表現する場合と、所有格の代名詞を用いて表現する場合、とである [Capell, A. 1969, Tryon, D. T. 1973, Yoshioka, M. 1987]。このうち、前者には「物の部分、身体部位、親族関係」に関わる名詞が該当し、それらに共通する特色として、「譲渡不可能」な性質を持っていることが挙げられる [Capell, A. 1969 :45]。

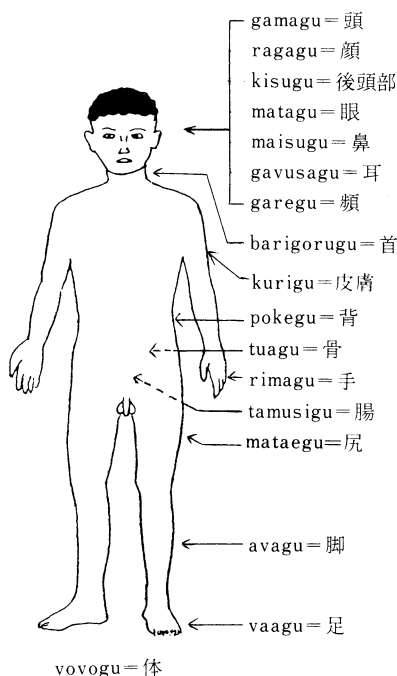
ナカナイ族の具体的例を取り上げてみよう。一般的に言って、物との所有関係を表すのに彼らは所有代名詞をよく使う。最初に、「豚(ボロ bolo)」という名詞を例にとり、その用法を説明しておきたい。次の事例の「テガク tegaku」、「タウメ taume」、「テタラ tetara」はそれぞれ「私の」、「君の」、「彼(女)の」を指す所有代名詞である。

私 の 豚 = bolo tegaku
君 の 豚 = bolo taume
彼(女)の豚 = bolo tetara

この例で豚は私的所有物として交換可能な物であり、所有代名詞はこの種の物に関して使われる。これに対して、人間の身体名称にはまったく異なる方法が用いられる。第1図には、この論考で再三登場する身体語彙が例示されている³⁾。その語彙はもちろん豚などの動物とも共通して使われるのだが、一般の事物を指すこととは異なり、人間の身体名称の場合は所属関係を表すのに接辞を用いるという特徴がある。ここでは「眼(マタ mata)」という語彙を例にとり説明したい。以下の事例の「グ gu」、「ム mu」はそれぞれ「私の」、「君の」を表す接辞であるとし、その使用

3 第1図に掲げた身体名称は、本稿の以下の論考で必要な部位のみ記しておく。

第1図 人間の身体名称 (接辞は自称形-gu, として表記)



法を例示してみたい。ただし「ラ ra」は三人称、つまり「彼(女)の」意味を持つとともに、後に見るように動物の身体やその他の隠喩的表現を含めて一般的事物に関わる身体名称として言及されるとき、この三人称的用法は適用される。例えば、「豚の眼」というときの「眼」はマタラ mata-ra である。

ひとまず人間に関わる身体名称として、次のように整理しておきたい。

- 私 の 眼 = mata-gu
- 君 の 眼 = mata-mu
- 彼(女)の眼 = mata-ra

対象と自己との関係を指示するのに、上に述べたこの二つの用法は明らかに異なっている。さしあたって前者の用法、つまり豚などの物に関わるときの用法をここでは「代名詞的用法」と呼び、

後者、つまり身体などに関わるときの用法を「接辞的用法」と呼んでおきたい。この「接辞的用法」に属す名詞は、身体語彙の他にもいくつか見られる。その代表は親族名称である。その詳細は別の機会に譲るとして、とりあえず一例のみ、「父(タマ tama)」なる語彙を取り上げると、「私の父」は「タマ・グ tama-gu」と表現される。所有代名詞をとる表現、「タマ・テガク」は文法的に誤りである。

この範疇に属す名詞は限定されていて、さしあたりこの「接辞的用法」に属す語彙を列挙すると、以下の通りである。

- 私の魂 = avure-gu, (君の = -mu, 彼 / 彼女の = -ra)
- 私の影 = kanu-gu (君の = -mu, 彼 / 彼女の = -ra)
- 私の友 = tami-gu (君の = -mu, 彼 / 彼女の

=-ra)

私の名前=aisa-gu (君の=-mu, 彼 / 彼女の
=-ra)

私の名付け子=tao-gu (君の=-mu, 彼 / 彼
女の=-ra)

私のけが=kakari-gu (君の=-mu, 彼 / 彼
女の=-ra)

私の病気=tibu-gu (君の=-mu, 彼 / 彼女
の=-ra)

こうした一連の用法からは、共通した特色が認められる。これらの例示のうち、「私の名付け子」とは、命名に関するナカナイ族の社会慣行の一つであって、赤子はしばしば近親者の名前に因んで付けられ、いったん付けられた後は終生、その子はその近親者と深い社会関係を保つという内容を持つ。その両者の関係はいわば親子関係に匹敵するほど、重要である。このような事例を通覧してみると、すでに指摘されているように、すべてが譲渡不可能な性格を帯ているのが分かる。魂や影などは、自己の身体と不可分な関係にあり、他者とは交換不可能であり、同じようにして自己の親族も恣意的にその関係を変更するのは不可能である。

自己の身体、自己に関わる属性、例えば魂、名前、影、病気とけが、そして自己の親族関係、これらは言うまでもなく譲渡不可能ののだが、ここでは自己の固有性という概念で一括して理解しておきたい。固有性とは本来的に自己に所属し、個人の存続に不可欠な本質的な性質のことである。このように考えれば、身体に関わる事柄ほど本質的なものはない。ナカナイ族自身、人間の身体は部品化して交換の対象になるとは決して考えていない。この意味で、身体こそは他の何物にも代替できない、自己に固有な存在と言える。

3 眼の隠喩的表現

人体の解剖学的実践には馴染みの薄いナカナイ族でも、身体構造の認識は豊かである。現在では、彼らは身体構造の知識、例えば内臓や神経組織についての知識を学校の授業から得ている。しかしながら、古くからの習慣として、彼らは野豚や火

食い鳥などの狩猟に長けていて、それらの解体には慣れており、そのためかなり詳しい身体構造の知識を身に付けている。彼らが人間の身体の内部構造を話すとき、このような動物の解剖学上の知識が援用される。

他方で、身体の各部位名称の正確さとともに、身体の隠喩的表現の多様性は彼らの文化の特色である。彼らにとって身体とは、まず第一に容器として、あるいは立体形をした存在として捉えられる。それゆえ、たいていの器状の物には人間と同じ身体名称があてがわれる。それとともに、ナカナイ族の身体表象を探っていくとき、我々日本人は彼らが用いる眼の隠喩を知って奇異な感じを覚えるはずである。この眼の隠喩の特異性こそが、彼らの文化の特色をなしている。

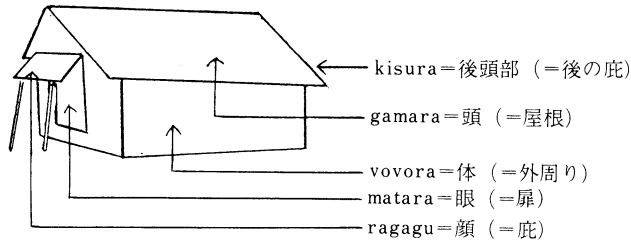
始めに家屋と身体の内喩から議論を展開したい。第2図は彼らの家屋を模型化したものである。伝統的な家屋は、サゴ椰子の葉で屋根を葺き、板で壁を作り、そして内部は土間、その土間には石蒸し用の石と炊事用の火処が置かれ、四隅には木の寝床をしつらえた、見た目には簡素な形式である。戸口は正面に一ヶ所、時として後正面にさらに一ヶ所設けられている。屋根は破風型であり、出っ張った庇が、正面の戸口に覆い被さるように一ヶ所、そして裏正面に戸口が付けられているときは、同じようにしてその戸口の上にも庇が作られる。

最近では、政府の奨励により改良した家屋の建設が流行し始めている。それは二階建の杭上家屋の建物で、かつ炊事場は別棟として設ける形式である。杭上家屋の一階の部分、つまり壁もなく野ざらしの土間は、日常の談笑の場であり、そこから階段で二階に上った部屋が寝室である。全体としては、しっかりとした骨組みで支えられた構えである。窓も多めに作られ、寝室が炊事場とも切り離されていることから分かるように、衛生環境を配慮した目的で設計された建物である。

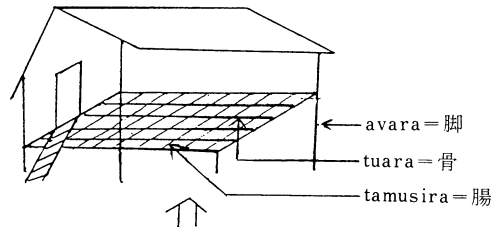
さて、これら家屋の各部位の名称を調べると、その主要な部分には人間と同じ身体名称があてがわれているという大きな特色が見られる。伝統的な建物は頭(=屋根)、顔(=庇)、後頭部(=後正面の庇)、眼(=扉)などの名称を持っているし、最近の流行である杭上家屋にも工夫を凝らし

第2図 家屋の名称

1 伝統型



2 最新型



た名称、例えば腸、脚、背骨などの名称が動員されている。第2図には杭上家屋を下から見上げた模型図も示し、その中で特に床面の板の張り方を強調しておいた。その床面のうち、太い木組の板は背骨、横木は腸、そして家屋を支える柱は脚という名称が使われている。

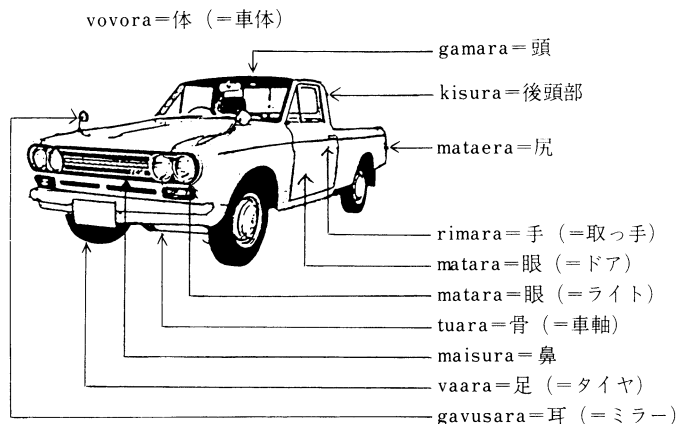
身体名称自体が家屋に付与される例は多くの社会でも見られ、決して珍しくはない。しかしながら、扉に対して付けられた名称がマタラであるという事実には眼を止めたい⁽⁴⁾。その事実は、感覚器官の文化的意味付けを考える場合、根本的な問題を投げかけているからである。このマタラは、眼を意味するマタラと同音異義語と解釈するのではなく、後に提示する事例などを考慮すれば、身体名称としての眼そのものを意味している、と見なすべきであろう。日本語では、「入口」、「出口」などと「口」という身体名称で扉を比喩的に表現する習慣を持つものに対して、ナカナイ族では「眼」になぞらえて表現しているわけである。

ナカナイでの眼の慣用的表現は、耳、口、鼻

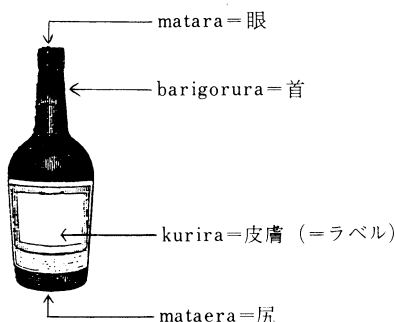
などが比較的平凡な存在なのに対して、多彩に見出される。次に図示した自動車の場合も、家屋と同じように各部位に身体名称が使われる例である(第3図)。正面のライトはマタラと呼ばれるが、ドアもマタラである。これよりして、身体名称としてのマタラには二つの意味が存在しているのが分かる。第一は、視覚器官としての眼そのものを指す。車のライトに対してはまさにこの意味で使われている。第二は、家屋の扉の例が示すように、体の開口部としての意味である。人間の体には口、鼻、耳、眼など、何箇所かの開口部があり、それらの器官はいずれも外界との境目をなしている。もちろんこれらの器官は、味覚、嗅覚、聴覚、視覚というそれぞれ独自の機能を持つのだが、生理的な機能を越えて、その形態や役割に基づきながら多様な慣用句を生み出している。日本語を例にとっても、その慣用句の世界は豊かである。例えば口には、発声器官に由来して「口うるさい」、「口が軽い」、「口(車)に乗る」、消化管として「口を糊する」、そして他にも「人口」、「口は禍の門」、

4 マタラ mata-ra の表記で、すでに述べたように接辞の-ra は三人称的用法としての他に、一般的事象に対しても使われる。その場合、日常表現は、a mata-ra、あるいは省略形の a mata となる。この表記での a は冠詞を意味する。ナカナイ族の筆者の調査地では、通常、名詞の前には a、もしくは e という冠詞を取るが、本稿ではこの冠詞はすべて省略した。

第3図 自動車の名称



第4図 罎(びん)の名称

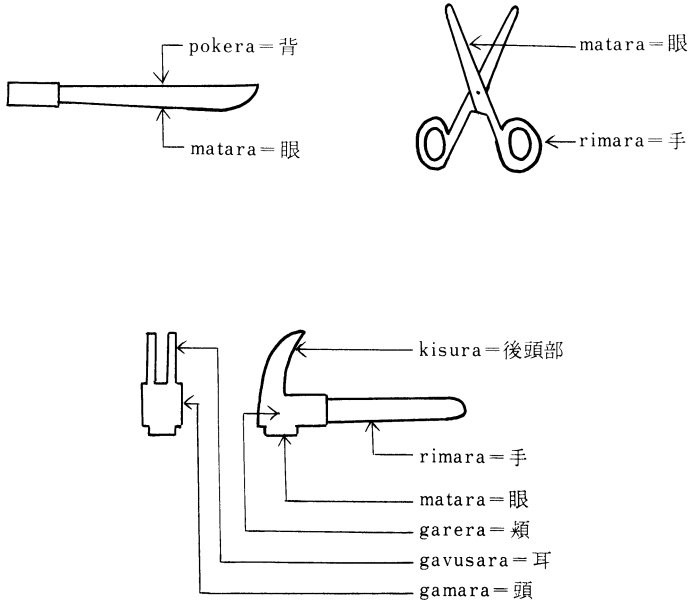


「鮑採りの」口開け(日)など多数の表現が聞かれる。なかでも開口部に由来する熟語として、先に挙げた「入口」、「出口」の他に、「蛇口」、「登山口」、そして何よりも「開口部」がある。これらの表現には、口こそが直接、外界との接点をなすきわめて大切な器官だという暗黙の了解が認められる。

しかしながら、口を代表的な開口部として比喩的表現の題材とする日本語の世界に対して、彼らは眼という器官を当てている。この事実こそは、たとえ生理学的機能は等しいにしても、身体器官に対する意味付けは文化によって異なることを雄弁に語っている。眼の比喩的表現、とくに開口部として位置付けられる眼の表現をさらに挙げてみよう。罎(ビン)は、注ぎ口がマタラ、つまり眼である(第4図)。さしずめ日本語に翻訳すれば、「注ぎ眼」という表現ができようか。言うまでもなく、この「眼」で外界と接触するからである。同じように、ドラム罐も注入口がマタラ、つまり眼である。

ブッシュナイフは、刀の峰側が背中と呼ばれるのに対して、刃渡りの面が眼、つまりマタラと呼ばれる。このように、対象と接触する部分がマタラであり、同じ理由で鋏(ハサミ)の場合は刃の面がマタラ(第5図)、そして針はその突端部がマタラと呼ばれる。ハンマーは顔の名称が随所によく使われていて、そのうちの叩き面がマタラである(第5図)。外界との接触点をマタラと呼ぶ表現は、さらに多くの例で見出せる。一例を挙げると、木株の切断面は、そこが新たに外部と接触するので、マタラ、つまり「切り口」にあらず「切り眼」である。もちろん慣用句なので、開口部がなぜ眼と表現されるかは、彼らにさえも分かつははずはない。彼らは「外部と接触する箇所がマタラ」と説明するのみである。しかしこの説明だけで十分な情報は伝達されている。疑いもなく、これらの隠喩的用法は我々の文化と比べてみてきわめて示唆的である。彼らにとっての眼が、対象と距離をおいて向かい合う視覚器官としての機能を持つことは言うまでもないが、それを越えてマタラが含

第5図 1) ブッシュナイフの名称, 2) はさみの名称, 3) ハンマーの名称



意する世界は豊かな広がりを持っていることを示しているからである。

確かに、眼は視覚器官であり、対象と距離をおきそれを客体化するという性質を持っている。一例を挙げてみよう。最近になって外部から時計がもたらされたとき、彼らはそれをマタラ・アロ matara aaro、すなわち、「太陽（アール）の眼」と名付けた。その命名法には物事を客体化するという視覚器官の特徴がよく出ている。それまでは時刻の確認を具体的な太陽の運航に従って判断していたのに対して、時計を使うことによって、抽象的な時間を小さな円盤のなかに見るようになったのである。

しかしながら、視覚器官としての一面の他に、外界との直接的接触を果たす触覚に近い働きを、ナカナイ族は彼らのマタラのなかにも認めていたようである。先のブッシュナイフや針棒では、対象に直に触れる部分がマタラ、すなわち隠喩としての眼であった。もちろんこのことは、針の先があたかも眼のように物を見ることを意味しない。ちょうどそれは、我々の表現での「パンの耳」という用法に等しい。それは、パンが耳を持っていて音を聞くなどということの意味せず、耳が聴覚器官である一方で顔の周辺部にあることから、その周辺性を表現したものに他ならない。開口部をマタラという表現は、もちろんその部分が視覚器官

として物を見ることを意味しない。それは、あくまでも外界との接点に対する言語表現である。

このような開口部としてのマタラの隠喩表現は、日本語にみる眼のイメージからは程遠い。そこで、日本語でのその意味構成をはっきりさせておく必要がある。『広辞林』をひもといて、「目《眼》」の項目から以下のように要点を抜き出してみよう。

- ① 物を見る働きをする器官。
- ② 目玉、眼球。
- ③ めづかい、めつき。
- ④ 目玉のような状態のもの、「卵（台風）の—」。
- ⑤ 見ること、見張り、監視。
- ⑥ 見る力、鑑識力。
- ⑦ 境遇、体験。「つらい—にあう」。
- ⑧ （縦横に交わるものの）すきま。「網の—」。
- ⑨ 並んだ歯の形。「やすり（のこぎり）の—」。
- ⑩ はかるためのしるし、「はかりの—」。
- ⑪ もんめ（匆）、「百—」。
- ⑫ さいころの面に数をしるした点。
- ⑬ 木目、木理。
- ⑭ 端と端の合う所。「折—」。

⑮ 囲碁で、囲んで領分がきまったところ。

日本語での「目(眼)」の言語表現の多くは、実際のところ以上のように複雑である。しかも「もんめ」、「境遇・体験」などの用法を見る限り、これらすべての意味が身体器官としての眼に由来するとは思われない。ことばは本来的に多義的であるから、これら十五の意味を一つに還元することはできないというのが、正しい言い方かもしれない。それを承知したうえで、なおかつ日本語とナカナイ語との用法を比較してみると、その間には決定的な違いが見出せる。日本語には開口部としての意味がないことが、それである。これに対して、ナカナイ語では対象と触れ合う側面がマタラであったが、その表現はむしろ手や口などの触覚器官に近い感じを覚えさせるに違いない。

もっとも、このように彼らのマタラについて説明すれば、我々はいささか奇異な戸惑いを感じるかもしれない。しかし実は、我々の言語のなかにも眼の触性に関わる表現がある。例えば、「眼に触れる」、あるいは「嘗めるように見る」という言い方である。にもかかわらず日本文化は、こうした修辭的用法としてわずかに残る触覚的側面を切り捨て、視覚としての眼の存在を強調し、純化していった。かくして、視覚を強調する表現には、「眼が肥える」、「眼が据わる」、「眼が高い」、そして「目処(メド)」、「目的」、「目標」など限りがない。上述のように多様な意味構成をとる日本語の「眼」は、やはり視覚文化と切っても切れない関係にあると言えよう。

事情は西欧でも同じと思われる。そればかりか、近代の西欧では、触覚を始めとしたすべての感覚のなかで、視覚の圧倒的優位性を確固として築き上げてきた。しかもその視覚の優位性とは、ただ「見る」という感覚器官の洗練さを言うのではなく、それが多様な観念の世界、あるいは隠喩の世界を生み出していったことに関連している。よく知られているように、その基底には、ルネッサンスの絵画描写における遠近法の登場がある。それは絵画描写における一つの技法に他ならないが、他方では、劇場や都市を構築するさいの新しい構図、空間を調和的に見通すという新しい角度からの視点をもたらした。同時にまた、それは見

る主体と見られる客体という分化を促し、<外からの眼差し>で世界を見るという近代社会の世界像を用意した。しばしば紹介されるように、フォーコーの議論で有名になったベンサム考案の<一望監視施設>(パノプティコン)は、見る者(監視者)と見られる者(囚人など)との間に巧みな見えのからくりを設定し、見る者の絶対的優位性を保証するものであった。十九世紀に発明された写真機は、いっそうこの主客の分離を固定した。多木浩二[1992]が力説するように、見る仕組みのモデルとしての眼の隠喩の絢爛さが近代以降の西欧社会を特色付けたのである。

さらにここで、社会学者としての蔵内数太の言う「視界の相互性」なる概念も俎上にのぼせてよい。蔵内は「自我体験」の重要性を論じ、かつ「視界」という概念を設定し、現象学の立場からする社会認識の方法を提唱している。蔵内はドイツの社会学者リットの説に依拠して言う。すなわち、「我と汝の視界の相互性は、汝が私の汝であることを意味する。そこで我はいわば汝の眼で自己を見るということなり、(中略)我・汝は本質的な体験統一を形成している」と[蔵内数太1966:158]。社会結合の基本として二者結合を考える際、蔵内は「視界」という概念で理解したのである。しかしすでに明らかなように、蔵内の議論は「眼の隠喩」の世界に根ざして、それは近代西欧世界で培われてきた概念を踏襲するものでしかなかった。

4 見ることと触れること

辞書的定義に従うと、眼とは「光の強弱や波長を刺激として受容する感覚器官」(『日本大百科全書』22巻、小学館、1988年)と言える。そして外界を知覚するにあたっては、視覚こそは基本的な器官として位置付けることもできよう。しかしながら、外界を知覚する営みは、決して視覚器官としての眼だけが受持つわけではない。触角を始めとした感覚器官も、同時に外界認知に関与しているからである。

ここに一つの議論がある。視覚が対象認知の性格を持つならば、認識論を基本として発展してきた近世の哲学はまさに「視覚を中心モデルとする

哲学」ということになるが、実はそれは、「視覚を説明する段になると、触覚をモデルにしている」のではないか、という反省である[木下喬1986]。これは、対象物を認識するとき、眼の働きだけでは不十分で、身体の運動に伴われた触覚の働きを必要とする、という議論である。我々の常識からすると、目の風景を見るのに触覚の助けを借りるとは、とても考えられないことである。しかしながら、「見るということは、本質的に“多感覚的”なもの」[佐々木正人1987:40]と捉えたらどうであろうか。見るという行為は、触覚・身体感覚を含め全身で行なっているという見方である。

佐々木はさらに、物事を知覚するのに能動的な体の動きの重要性を力説している。すなわち、「眼の前にひろがる視覚世界は、我々のからだが動く不安定に形を変え、動きに連動して刻々とその見えを変化させる。(中略)頭を横に向けると、今まで見えていたものは視野から消える。しかし再びそこからからだを向けると、以前と同じ視覚的風景を捉えることができる。我々はこのように自らからだを動かすことで、ものがいつもそこに在り続ける、世界が安定してそこにあり続けるという体験を得る。このようにからだの動きを軸にした世界とのかかわりのなかで、はじめて不変なもの世界と、その背後にひろがる安定した<空間>の存在が実感される」[佐々木正人1987:67]。絶えず人間は体を動かして、その動作に伴って視覚の働きが完全になる、と言うのである。これは、身体そのものへの省察を抜きにして組み立てた視覚中心モデルの不備を諫めた発言である。対象認知にあたって動的な身体活動の重要性を強調する立場が、ここでは語られている。

もとよりナカナイ族に知覚心理学の専門家がいないわけではないし、「知覚の現象学」が彼らの間で世間話として流行しているわけではない。それに、木下や佐々木の洗練された認知理論とナカナイ族の隠喩の議論とはまったく性質を異にしている。ナカナイ族が提供しているのはことばの運用の問題であり、心理学の実験室ではない。いわんや彼らがマタラという語を発するとき、ことばと認識論の関係を意識しているのではない。しかしながら彼らのマタラということばは、様々な思い

を抱かせる。

英語で「理解する」とは“I understand”だが、別の表現では、“I see”でもある。英語の世界では、「眼で見る」ことがそのまま「理解する」ことに通じてしまう。始めに引用したスヤ族とはまったく異なって、英語の世界は徹底して視覚優先の社会のようである。しかも挙げ句の果てに、「見る」という視覚の働きが「理解する」という精神活動にまで昇華されてしまっている。西欧近代、とりわけ英語圏が視覚優先社会として登場してきた背景には、こうした日常英語の思考回路が大いに働いていたと思われる。考えてみれば、この思考様式は決して普遍的ではなかった。先の蔵内数太の「視界の相互性」という概念は、この意味できわめて限定された枠組みのなかに閉ざされていたことになる。

それぞれの社会が、身体器官としての眼に寄せる文化的意味付けは多様である。すでに理解されたように、日本、そして西欧社会は眼の視覚表現を際立たせ、それを純化していく方向を辿った。言い換えると、視覚の持つ基本的性格として、見る主体と見られる客体との間にあって対象を客体化する働きを強調していった。中村も指摘するように、こうした視覚の働きの強調は客観性を重視する近代科学や技術の発達に大いに役立ったことだろう[中村雄二郎1979:53]。これに対して、ナカナイ族は明らかにそれとは異なった道筋を選んだようである。眼を開口部として位置付けるナカナイ族のマタラの世界は、むしろ瑞々しい感覚の働きの重要性を教えているようである。ここにパイナップルがあって、それを食べようとして、葉の付いた短い茎と果実の境目をナイフで切断したとしよう。そこに現れる断面は、彼らのことばでマタラである。この表現からは、新たに外界と接触したときのほとばしるほどの初々しさが感じ取れよう。こうしてみると、両文化の相異ははっきりしている。

再び彼らのマタラ、つまり眼の隠喩を考えてみよう。これまでの記述では、眼は視覚器官である一方で、それとは異なる隠喩表現の題材となっている事実に着目してきた。それは対象との接触の役割を果たす開口部の意味であった。対象と「触れ合う」ことに関わるこの意味はきわめて象徴的

である。それは触角的感性に関わる世界の重要性を教えている。ナカナイ族に見られたマタラの多様な意味構成は、このように多感覚的な世界を示

していたのである。その世界は、眼の慣用句にみられたように視覚の重要性を過度にまで強調する我々の文化とは、あまりにも対照的である。

引用文献

- 尼ヶ崎彬
1990『ことばと身体』 勁草書房。
- Capell, A.
1969 *A Survey of New Guinea Language*. Sydney : Sydney Univ. Press.
- Goodale, J. G.
1985 Pig's Teeth and Skull Cycles : Both Sides of the Face of Humanity. *American Ethnologist*. 12-2.
- Howes, D. ed.
1991 *The Varieties of Sensory Experience*. Toronto : Univ. of Toronto Press.
- 河合利光
1993「文化と身体経験」『園田学園女子大学論文集』 27。
- 木下喬
1986「視覚と触覚」 大森荘蔵他編『身体・感覚・精神（新・岩波講座 哲学9）』 岩波書店。
- 蔵内数太
1966『社会学（増補版）』培風館。
- Lakoff, G. & M. Johnson
1980 *Metaphors We Live By*. Chicago : Univ. of Chicago Press. (渡部昇一、楠瀬淳三、下谷和幸訳
1986『レトリックと人生』大修館)
- 丸山欣哉
1969「感覚間相互作用」 苧坂良二編『講座心理学（3 感覚）』 東大出版会。
- Morris, D.
1985 *Body Watching*. London : Equinox. (藤田統訳 1992『ボディウォッチング』小学館)
- 中村雄二郎
1979『共通感覚論』 岩波書店。
- Panoff, F.
1969 Some Facets of Maenge Horticulture. *Oceania*. 40-1.
- 佐々木正人
1987『からだ・認識の原点』 東大出版会。
- Seeger, A.
1975 The Meaning of Body Ornaments : A Suyá Example. *Ethnology*. 14-3.
- 多木浩二
1992『眼の隠喩』 青土社。
- Tryon, D. T.
1973 Linguistic Subgrouping in the New Hebrides. *Oceanic Linguistics*. 12 :303-351.
- Valentine, C. A.
1965 The Lakalai of New Britain. in Lawrence, P. & M. J. Meggitt (eds.), *Gods, Ghosts and Men in Melanesia*. London : Oxford Univ. Press.
- 吉岡政徳
1987 The Story of Raga. *Journal of the Faculty of Liberal Arts, Shinshu Univ. Cultural Science*. 21.